

## INTERVIEW

## 農業経験はゼロ。

## 01

「やりたい」という気持ちと、  
周りの助けで“いま”がある。

## 人生がかかっていたし、とにかく必死に勉強しました。

特産品のさくらんぼをはじめ、リンゴや桃といった果物、山形名物のいも煮には欠かせない伝統野菜の子姫芋など、農業が盛んな寒河江。そんな自然豊かで年間を通して多様な作物を栽培できる街での就農を目指し、国重さんご夫婦は移住しました。きっかけは脱サラしてさくらんぼの専業農家になった妙子さんのお父さん。当時大阪で会社員として働いていた左門さんは、お父さんの話を聞いているうちに農業に惹かれるようになったと言います。

「でも経験はゼロ。農業でやっていけるか心配だったので、大阪で働きながら就農に関する本を読み漁ったり、農業支援センター主催のバスツアーに参加したり、地元農家さんに会いに行ったりもしました」と左門さん。農業に興味を持ってから移住するまでの約2年、不安を打ち消すように必死に勉強されたそうです。

移住当初は研修先にお世話になりながら切り詰めて生活する日々。「お父さんも専業になったばかりで一緒にやる規模ではなかったですし、『自分の園を持って自分で動かしたい』という思いがありました。跡継ぎ農家でもなかったので、農機具や土地を探すところからはじまりました」と当時を振り返ります。

農家として軌道に乗るまでは約6年。転機になったのは今の土地を紹介してもらい、いいさくらんぼが育つようになってから。収穫量があがると収益が出て人を雇ってよりよいものを作れる、といういい流れができてきたのです。「売上＝面積って考えていて...それまでは売上が少なかったらもっと畑を借りるという感じでした。しかもそれを二人だけでやっていたんですよね。でも周りの人たちがいろいろと紹介くださり、いい畑と出会えました。今の場所で農業すると決めてから、一段と地域に溶け込めるようになりました」と妙子さん。



【果樹農園 青い空】

## 国重 左門さん 一家

## From Osaka (Iターン)

山口出身の左門さんと寒河江出身の妙さんは学生時代に関西で知り合い結婚。脱サラして移住後、専業農家として独立し『果樹農園 青い空』を開園させた。山形名物のさくらんぼや桃、秘伝枝豆など、土壌づくりからこだわった栽培を行っている。現在、寒河江で生まれ育った星秀(せいしゅう)さん、吟(ぎん)くん、彩(あや)ちゃんを含めた5人暮らし。



ホームページで発信するブログには作業日誌や日常風景のほか、子どものお手伝いの様子を紹介。「実際に会ったことのないお客さんからも「子どもの成長を楽しみにしています」と言ってもらえたり...ありがたいことにご数年常連のお客さんがついてくれるようになりました」と左門さん。



## 一代目でやれることはやった。見える世界が変わってきました。

2020年には研修生の受け入れをはじめたお二人。農業未経験で、桃農家に憧れる東京からの移住者を受け入れ、今度は自らが教える立場となり、“移住者・非農家出身”としての経験を余すことなく伝えています。

研修ではまず栽培作物の年間を通しての作業を体験してもらい、農業をする上で必要な体力・精神力を身に付けることからスタート。そして生産・営業・販売面についても、同じ境遇をたどった経験者だからこそわかるリアルなアドバイスを伝授します。「栽培面積や収穫量が少ない場合は、市場出荷よりも自分で値段を決める個人販売がいいと思います。それを少しずつ増やして行って、僕みたいに面積をどんどん増やして販売方法を切り替えるのか、それとももっと人を雇用して一人一人のお客さんに対応していくのか。やり方

は人それぞれで最終的に決めるのはその人自身。農家を目指す人たちには、ありのままをお話しています。失敗談ばかりで恥ずかしいですけどね(笑)」と左門さん。

農業はすべてを自分で決めて作業するため、どうしても自己流になってしまうもの。研修受け入れによって他農家の話を聞く機会も増え、それが新しい発見にもつながり、いい刺激になったと語るお二人。「就農時の環境で差が出てしまっていますが、年々農業経営を続けていくと見える世界が変わってきます。すべては自分次第、やりがいがあるのは間違いありません」と同志に熱いエールを送ります。

自身が一代目となり、ゼロから築き上げた『果樹農園 青い空』も無事、15年目を迎えました。